

石館守三博士の生涯から教えられるもの： 3つのお仕事に焦点を絞って

森本 和滋

はじめに

今年、石館守三博士が1996年（平成8年）7月18日逝去され、20年を迎える。先生の歩まれた95歳までの勇ましい高尚なる生涯から¹⁻⁴⁾、医療分野、特に医学関係者との交流を通してなされた3つの業績に焦点を絞り、当時の医師や看護師と薬剤師との医療連携について教えられるものを当時の人々の遺された証言から辿ってみた³⁻⁶⁾。

1. NIHSに蒔かれた癌研究の種：小田嶋成和薬品病理部長

昭和40年12月所長に就任してから、①毒性部門の強化、②化学物質の発癌性に関する研究の促進、③人事刷新、に尽力された。先生ご自身の思い出を紹介する⁵⁾。

「1966年、国立衛試（NIHS）入りをしてみると、食品添加物の毒性、がん原性の問題が国の内外で問題になりつつあったし、医薬品の発がん試験も放任できぬ状況で、当時のNIHSの施設と能力はこの時運に対応が困難なことを知り、施設の純増は極めて困難のため、一部門を整理して、薬品病理部を新設する計画を立て、それが1969年実施できた。それも私の意中に小田嶋成和君があったからであった。故吉田富三門下の俊英の一人として、佐々木研究所に来るようになってからの交わりであった。私の在任中、この一事だけは功績らしいものとして自負しているところである。」

「私の書齋で、小田嶋君としばしば、夜のふけるのを忘れて、奥さんに謝りながら議論したことは忘れ得ない思い出である。研究の討議だけで無かった。研究者の人間としてのあり方、終局における人生の意義についても語ることが多かった。それは、彼の人となり、自然に私にそうさせるのであった。彼の家庭が、浄土真宗の家柄であったことも思い当たるのである。」

2. 中央薬事審議会会長：キノホルム、スモン、誓いの碑

昭和38、9年（1964年）には各地に集団発生。亜急性（subacute）、脊髄（myelo）、視神経（optic）、神経炎（neuropathy）を略しSMON（スモン病）と一般に呼ばれた。吉岡正則博士の証言は⁶⁾、「1970年6月初旬に、井形昭弘助手が偶々三楽病院で警鐘講演をしたところ、講演を傾聴した注意深い看護師が患者2例で緑尿がありと報告した。6月末スモン研究調査協議会が開かれ、どの演題もウイルス説に帰結しており、最後にオブザーバーであった田村と吉岡が緑色素の本態を発表し、緑色反応を実演した。「オー」と会場がどよめいた。7月に石館博士が、古巣の研究室に現れた。田村教授は直立不動で迎えた。吉岡はマッカーサー元帥風の堂々たる大先輩に緊張しながら、研究成果を数分で伝えた。石館博士は、孫弟子の意外な研究展開に大変驚いた。直ちに、石館博士は、数十年にわたる世界的な整腸剤キノホルムの「日本での販売を禁止する」とつぶやいた。「本当ですか」と疑った。同年9月、石館博士はその英断を実行した。その後の疫学調査から、長年猖獗したスモンの発生はなくなった。」平成11（1999）年8月24日に過去の反省に立った「誓いの碑」が厚生省の正面玄関に建立された⁷⁾。

3. 石館薬剤師会長と武見医師会長との歴史的会談：その後の医薬分業の進展

1973年5月21日、石館会長と武見会長との歴史的会談が行われた⁸⁾。石館会長は日本医師会を訪問し、武見会長と1時間余り分業問題を中心に、現在の諸問題について懇談した。武見会長は、医薬分業問題については基本的には賛成であり共同施設として調剤センターを設置すること、そして近隣の医師と薬剤師が懇談を進めていくことで意

見の一致をみた。周りの人々の証言によると⁸⁾「石館さんが何回も武見さんに話をし、分業を説いたらしい。そういうことを一生懸命したので、武見さんが少しずつ変わったらしいのだよね。石館さんに対する態度が、石館さんが時には下に出て、一生懸命、「それもね」というような調子でもって訥々と話をしていたらしいのです。機会をみては行って話しをしたらしい。」

4. 勇ましい高尚な生き方の背後にあるもの

古稀を迎えた父を、長男基は、「私は、親父が怖い。普通、若い頃に厳しい親父は老年に入って優しくなるものだが、私の親父にはそれがない。終戦後、際どいところで焼け残った我が家の子供部屋は、改造されて基督教の伝道所となった。親父の大学時代の先輩、小西芳之助先生がその牧師に迎えられてから二十年になるが、現在も日曜日に三十人以上の人々が集まってくる。多忙の親父も月に一回、必ずここで説教を担当する。こんな時、親父は科学者としてではなく、一人の人間として真の人間の生き方を訴える。」と述べている^{3,4)}。

おわりに

勇気ある決断、人との出逢いを大切にされた生

き方、熱き友情、使命感と責任感等多くの示唆に富む生き方を石館先生より教わった。医療連携のあるべき姿についても多くのヒントを頂いたことを感謝して稿を終えたい。

参考資料

- 1) 蝦名賢造. 石館守三伝—勇ましい高尚なる生涯, 新評論, 1997. p. 1-294
- 2) 石館守三. はまなすのこみち—私の歩んだ道—, 廣川書店, 1988. p. 1-101
- 3) 石館基. 天国の外交官小西芳之助・恵心流キリスト教, 高円寺家庭集会. 2010. p. 1-157
- 4) 森本和滋. 勇ましい高尚な生涯 石館守三博士—没後20年, 生誕115年. 薬史学雑誌. 2016; 51(1): 1-4
- 5) 小田嶋成和先生追悼集発行世話人. 和一小田嶋成和先生追悼集, 1982. p. 1-164
- 6) 吉岡正則. キノホルム薬害に終止符をうった田村善藏の研究成果; 薬学史事典. In: 日本薬史学会(編) 奥田潤, 西川隆. 薬事日報社. 2016. p. 409-411
- 7) 森本和滋, 藤原康弘, 川原章. 医薬品医療機器審査センター (PMDEC) から医薬品医療機器総合機構 (PMDA) への15年の歩み: 設立初期を振り返って. 薬史学雑誌. 2011; 46(1): 38-50
- 8) 秋葉保次, 中村健, 西川隆, 渡辺徹 (編). 医薬分業の歴史 証言で綴る日本の医薬分業史. 薬事日報社, 2012. p. 1-675
(平成28年12月六史学会合同例会)

日本の鶏病の歴史

佐藤 静夫, 佐藤 国雄

養鶏産業の変遷と鶏病: わが国の鶏卵生産は、明治維新後の需要増加を契機に始まり、大正期には、政府の奨励策もあり、採卵養鶏が発展し1925年の総飼育羽数は3,700万羽となった。明治・大正期には主に家禽コレラの流行が記録されている。また、大正末期の1923-24年頃に愛知県下から朝鮮へ移出されたひなの罹患が契機となり、ひな白痢 (Pullorum disease) の存在が知られた。昭和初期には致死率の高いニューカッスル病 (Newcastle disease: ND) アジア型が流行し、大きな被

害を受けたが、政府の鶏卵増産10ヵ年計画にに応じ、農家養鶏を中心に小規模専業養鶏 (300羽程度) も隆盛となり、1935年には総飼育羽数5,130万羽、採卵成鶏羽数 (以下、飼養羽数) 2,770万羽 (戸数300万戸) に達した。

この様に発展段階にあった採卵養鶏は、第二次大戦 (1941-1945) で壊滅的打撃を蒙り、1946年の飼養羽数は、690万羽と最低を記録した。採卵養鶏の回復期から発展期 (1950-70) には、輸入鶏の増加や経営の大規模化に伴う飼育密度の増大